

紀要の発刊に寄せて

平成14年4月に大学教育機能開発センターが開設されてから8年が過ぎようとしています。この間、本センターは長崎大学の全学教育やFDをはじめとした教育や教育システムの充実・向上に関わってまいりました。その結果、全学の教員が何らかの形で教養教育に携わるシステムが定着するとともに、全学や各学部のFDが着実に行われるようになりました。もちろん、それらが完全な形で実施されつつあるとは思いませんが、本センターがこれらの新しいシステムの円滑な立ち上げと教育の充実に貢献をしてきたと思っています。

開設当時、センターを取り巻く状況は、学内外ともに非常に厳しいものでありました。文部科学省は、大学教育の充実に関わるセンターを当初の予定通り地域毎に開設したので、これ以上のセンターの開設は認めないという方針を示し、新しいセンター開設の申請は受け付けませんでした。この方針を変えてもらうために、本学が独自に行った国内外の教養教育やFDの調査をもとに、それぞれの大学の歴史があつて教養教育のシステムが作られていることや、各大学の事情を踏まえてのFDが展開されなければ効果がないことを訴え続けました。何度も足を運んだものですから、文部科学省の担当課長さんも最後は根負けしたのかもしれませんが、「我々はともかく、財務省を説得できるセンターの役割と将来像を示して下さい。」と言ってくれました。一方、学内においては本センターの専任教員ポストを捻出するために、教養部の改組転換の際に各学部に分属した教員ポストをもう一度戻してほしいとのお願いをしました。しかし、各学部のガードは堅く、すんなりとは認めて頂けませんでした。文部科学省という外堀が埋まりそうだということを励みに、根気よくお願いし続け、最終的には「教養教育の充実やFDの定着を図ること」を条件にポストの提供を認めていただきました。そして、この間の議論を取り入れてセンターの将来像をより具体的に説得力のあるものにすることができました。その結果、文部科学省の方針変更の一番手として、本学のセンターが誕生することになりました。それ以降、地方の大学に大学教育に関するセンターが開設されていきました。この意味では、本センターは地方にある大学教育に関するセンターの先駆けの役割を果たしたことになります。

それから8年、本センターは開設時のリードを保っているでしょうか。また、学内において教育改革やFD進化の中心としての役割を高めているでしょうか。反省すべき点は多いと思います。最も大きな反省は、センターの先生方が教育改革やFD進化に関する共通の土俵を持たなかったことだと思います。今回、その土俵の一つである紀要が刊行されることになりました。これによって、大学教育に関する実践研究の成果の共有や、学内外への発信が可能になりました。これを契機にして進化した長崎大学独自の授業方法やFD形態が生まれてくると確信しています。そして、この更なる大学教育の充実への一步を素直に喜びたいと思います。

2010年3月

長崎大学大学教育機能開発センター長
橋 本 健 夫